

## 伊保谷と亀首谷の古墳時代

森 泰 通

### 1. 伊保谷と亀首谷の立地

本稿では、伊保廃寺の前史にあたる、伊保谷およびその東側に接続する亀首谷の古墳時代の遺跡動向を確認し、寺院造営に至る流れを整理する。籠川を介して繋がる両者を関連付けて、古墳時代の視点から伊保廃寺を検討することで、古代における地域社会の評価に資することを目的とする。

伊保廃寺の北側を東流する伊保川は、市域の北西端に位置する八草町を水源とし、割田川と秋合川の合流点を最上部とする長さ 8.8km の一級河川である（第 3 図）。南流した伊保川は、西から流れて来た田糶川と合流した後に保見町地内で東に大きく向きを変える。ここから籠川に合流するまで、北側の丘陵と南側の上位段丘面（挙母面）に挟まれた幅 500m 前後の平野（下位・低位段丘面を含む）が広がる空間を伊保谷と呼ぶ。伊保川は伊保谷を約 3.4km 東進して、亀首谷を南下してきた籠川に合流する。伊保谷には伊保遺跡や伊保廃寺が立地しており、和名抄にある賀茂郡伊保郷の本拠地と言える場所である。

一方、籠川は猿投山に発する猿投川を源とし、広沢川・加納川などと合流しながら南下している。やがて西から流れてきた伊保川と合流し、3km ほど南東に流れて、古墳時代後期の拠点集落である梅坪遺跡の南東で矢作川に注ぎ込む長さ 11.7km の一級河川である（第 3 図）。伊保川との合流点付近までには、丘陵や中位段丘面（碧海面）に挟まれた幅 500m 前後の比較的豊かな平野（下位・低位段丘面を含む）が広がっており、本稿ではこの空間を亀首谷と呼ぶ。古墳・舞木廃寺などの遺跡の状況や式内社である猿投神社の存在から、この亀首谷を古代の賀茂郡賀茂郷にあてる意見が多い（豊田市 1976 など）。



第 1 図 伊保谷と亀首谷（旧挙母地区から北側を望む）

『新修豊田市史 原始』で設定した古墳のまとめり（森 2020a）では、伊保谷が「伊保川流域」の「伊保谷」、亀首谷が「籠川流域」の「上流域」および「中流域」の大部分に該当する。

## 2. 古墳時代の「賀茂」

### (1) 集落と古墳

古代における豊田市域は、南部の上郷・高岡地区がおよそ碧海郡、矢作川西岸の伊保谷・亀首谷や、現在の中心市街地である挙母地区、同東岸の高橋地区などを含むその他の大部分はおおむね賀茂郡に属している。本稿では市内におけるこれらの地域を、必要に応じて「賀茂」「碧海」と呼称する（第2図）。

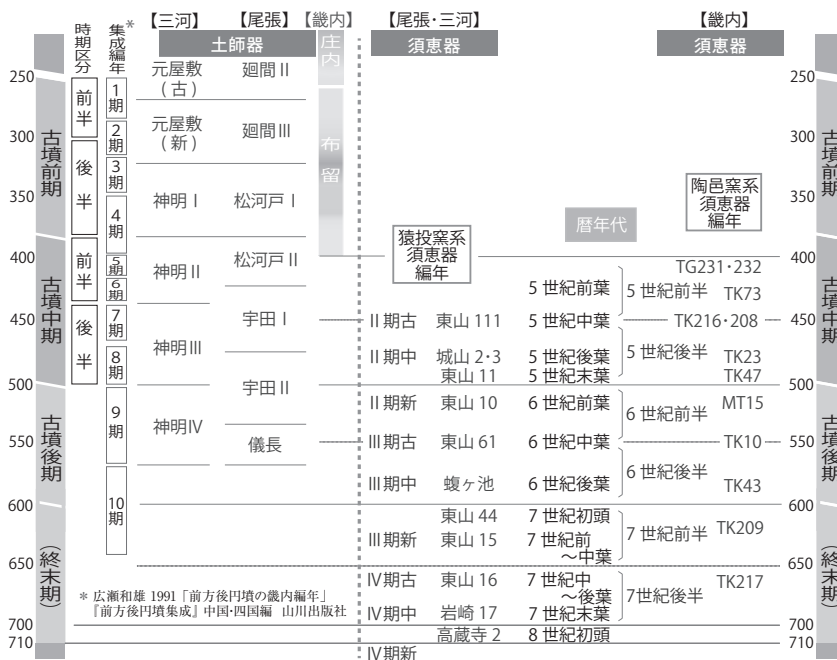
市域でこれまでに時期がおおよそ判別した古墳時代の建物は約760棟、確認されている古墳は西三河最多の276基を数える。

そのうち「賀茂」は建物が約

510棟、古墳が262基を数える。「賀茂」の集落と古墳の状況を一瞥しておく、集落は弥生時代終末期に盛況を迎えており、例えば代表的な集落遺跡である高橋遺跡・梅坪遺跡・南山畑遺跡の3遺跡で174棟（以上）の竪穴建物が確認されている。ところが、古墳時代前期前半の3世紀後半になると南山畑遺跡はもはや存続せず、高橋遺跡・梅坪遺跡を合わせても竪穴建物の数は10棟程度に激減する。「碧海」の上郷地区の集落においても同じ傾向が認められる。4世紀に入ると賀茂の集落は復興し、5世紀前葉までに90棟以上の竪穴建物が確認されている。上郷地区では、天神前遺跡で水田が営まれている。また、水入遺跡の大溝は土塁を含めると幅10m、深さ3m以上と大規模で、南西方向に接続するとみられる天神前遺跡や郷上遺跡の大溝を合わせると、総延長1km以上に及ぶ。矢作川に向かって開口する谷地形の水を引き込む基幹水路の役割を果たしていたと考えられ、5世紀代を中心に沖積平野の大規模な開発が行われていたことが分かる。

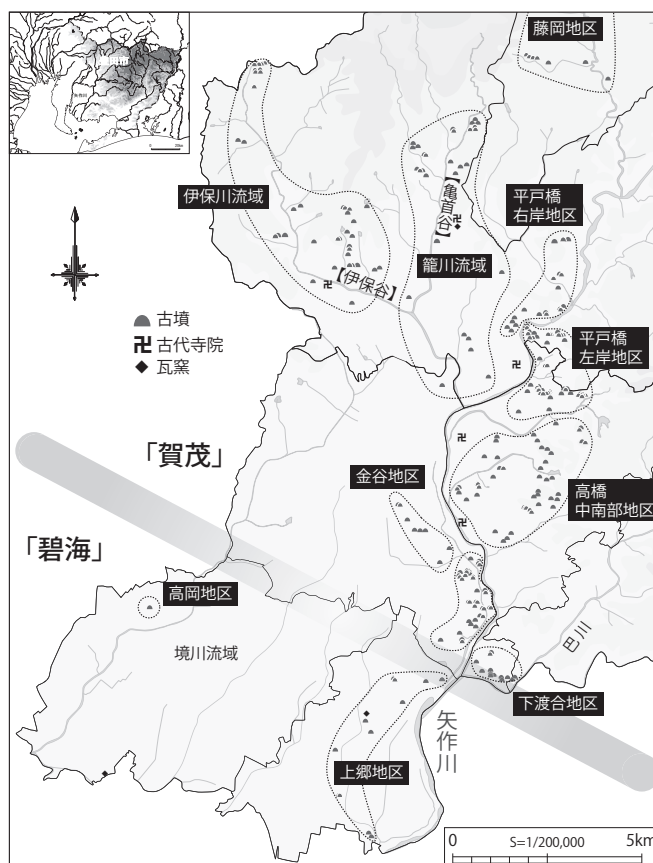
一方、市域の集落は5世紀前葉に大規模な洪水に見舞われており、5世紀中葉から後葉を最後に一旦断絶する集落が複数確認される。これらの集落の多くが復興するのは6世紀後葉からであり、7世紀から8世紀初頭のいわゆる古墳時代終末期になると、賀茂では約300棟の建物が確認されている。これは、「賀茂」における古墳時代の建物総数の実に6割近くを占めており、この時期に集落などが盛況を迎えていたこと

第1表 古墳時代の土器編年と本稿で表記する暦年代



が分かる。

古墳については、「賀茂」262基のうち、発掘調査や採集資料などによって内容がある程度判明した古墳を時期的に整理してみると、前期3基(1.4%)、中期17基(7.9%)、後期194基(90.7%)となり、後期古墳の数が圧倒的に多いことが分かる<sup>1)</sup>。横穴式石室をもつ市内の古墳は、今のところ6世紀前葉の荒山1号墳を最古としているが(森2021a)、横穴式石室は6世紀中葉から急速に普及し、古墳の数も増加する。古墳築造は終末期の7世紀代にピークを迎え、矢作川東岸の豊田盆地周縁部の丘陵端部にあたる高橋中南部地区などでは、最終末期の7世紀末葉から8世紀初頭に至っても盛んに造墓が行われているが、おそらく奈良時代の開始と前後する頃に急速に停止している(森2020a)。



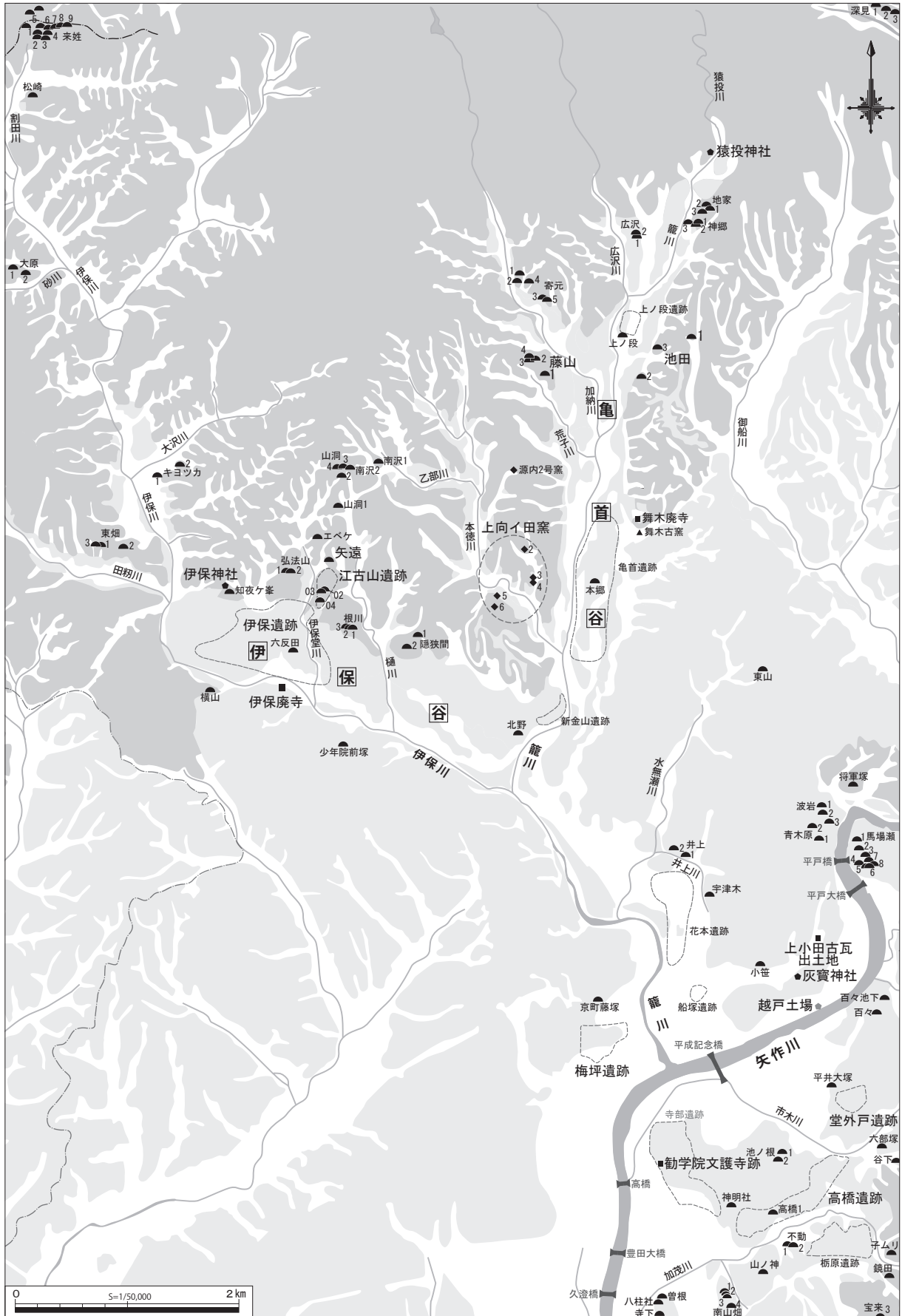
第2図 豊田市西部の古墳・古代寺院・瓦窯分布図

## (2) 渡来系文物と新興勢力

「碧海」の上郷地区は、5世紀中葉にいち早く渡来系文化を受容した地域として知られている。神明遺跡では、須恵器やカマドなどが5世紀後半のうちに普及し、集落の端部に築かれた三味線塚古墳の周溝出土資料を合わせると、U字形刃先が4点出土している。県内で出土した古墳時代のU字形刃先は他に2点を数えるのみであり、鉄製品は再加工されて姿を留めないことが基本であるとしても、神明遺跡が豊富にU字形刃先を所有し、周辺の土地開発などに積極的に関与した集落であったことがうかがわれる。また、小谷を隔てた西側の矢迫遺跡では、朝鮮半島の百濟を起源とする大壁建物が、6世紀後半から7世紀代にかけて3棟見つかっている。

一方、「賀茂」においては、6世紀以降に渡来系文物が散見されるようになる。神明社古墳の渡来系竪穴式石室、荒山古墳群の横穴式石室や三足壺、伊保谷を望む江古山遺跡の移動式カマドと盤(第5図/飯塚編2013)、梅坪遺跡の角杯(第8図/森2021a)、岩長古墳群ST06の鉄鐸などや、横穴式石室の奥壁隅に土師器甕を据える習俗(深谷2011)などは、6～7世紀の「賀茂」においても、渡来系文化に通じた人物が地域社会の中で一定の役割を果たしていたことを伝えている。

また、矢作川東岸の高橋地区の堂外戸遺跡では、4世紀後半から7世紀後半にかけて首長や有力者の居宅と考えられる大型竪穴建物が継続的におおむね継続的に存在しており、6世紀後半になると、集落の北端に一辺約9mの大型竪穴建物、2×2間の総柱建物群、幅25mほどの空閑地(広場)、2×3間の総柱の独立棟持柱建物などで構成される2,000m<sup>2</sup>ほどの特別な空間が形成される。独立棟持柱建物は伊勢神宮社殿に代表される神明造という古い神社建築様式であり、弥生絵画の主要な画題となっていることや祭祀



第3図 伊保谷と亀首谷周辺の遺跡分布図

遺物を伴う事例もあることなどから、「神殿」と位置付ける意見もある（広瀬 1998）。そのうち、総柱の独立棟持柱建物は西日本を中心に 9 例が確認されており、本例は国内最東に位置している。西日本的な祭祀が、建物のかたちと共に堂外戸遺跡に入ってきた可能性を示唆している。続く 7 世紀代には、竪穴建物が 9 棟確認されているのに対し、掘立柱建物は側柱建物 18 棟と総柱建物 17 棟の計 35 棟が想定される。県内のこの時期の集落は基本的に竪穴建物を主体とするが、本遺跡では掘立柱建物が卓越している。本遺跡は西日本的な要素を積極的に取り込んだ、もしくはそこから移住してきた人々がいた集落と言えるだろう。市木川を挟んで南に展開する高橋遺跡では、7 世紀代から 8 世紀初頭にかけて、大型建物が建ち並ぶなど活況を呈しており、高橋地区の矢作川に近い段丘上には少数の有力墳が、集落背後の豊田盆地周縁部には 7 世紀代を中心とする多数の小規模墳が築かれている。前者が堂外戸遺跡や高橋遺跡など、高橋地区の伝統的かつ有力な首長層の古墳であるのに対し、後者は新たに古墳を築造し得るようになった人たち、あるいは西日本の社会に通じていた、もしくは移住してきた人たちが新たな墓域を求め、「奥津城」として築いた可能性がある（森 2020a）。このように、7 世紀代の「賀茂」においては、律令国家に向かうさまざまな動きの中で、渡来系あるいは畿内などを起源とする人・モノ・情報が盛んに行き交っていたとみられる。

### 3. 伊保谷の遺跡

#### (1) 集落

伊保川が狭長な谷底平野を伴いながら南流し、伊保谷に入るまでの間（後述する伊保川流域の「北部」に該当）には、今のところ集落遺跡は確認されていない。

伊保谷の伝統的・拠点的な集落は、伊保遺跡である。面的な調査が実施できなかったため全貌を判断しがたいが、報告書では下位段丘面（越戸面）の東西 1.4km、南北 0.7km の範囲に展開すると理解されている（大橋編 1974）。実際には時期・地点を異にする複数の遺跡の総称と考えた方が良いだろう。弥生時代中期後葉から遺物が確認され、保見交流館南側の四反田地区では後期・終末期の集落が確認されている。特筆すべきは、伊保堂川沿いの北側の谷に位置する柵口地区（保見交流館の北約 300m）に営まれた古墳時代開始期（3 世紀中葉前後）の集落である。竪穴建物や井戸状遺構などがあり、溝からは大量のタタキ甕のほかにも、タタキ調整をもつ壺や小型甕が出土した。タタキ甕は矢作川流域から点的に出土しているが、これほどまとまった出土例はほかになく、畿内を淵源とするタタキ甕を作成する技法をもった人たちが、この地に移住してきた可能性を示している。この集落は 3 世紀後半のうちに姿を消すが、5 世紀末葉には南側に新たな集落が形成され、6 世紀中葉までの遺物が数多く出土している。伊保小学校南側の片坂地区や四反田地区を中心に集落が営まれていたが、6 世紀後葉にはおそらく規模が縮小し、7 世紀初頭を最後に断絶している。四反田地区の遺構の上層には、多数の礫を含む土が覆っていたことから、「洪水等によって土砂に埋まり、遺跡が壊滅したのではなかろうか」と推測されている（大橋編 1974）。

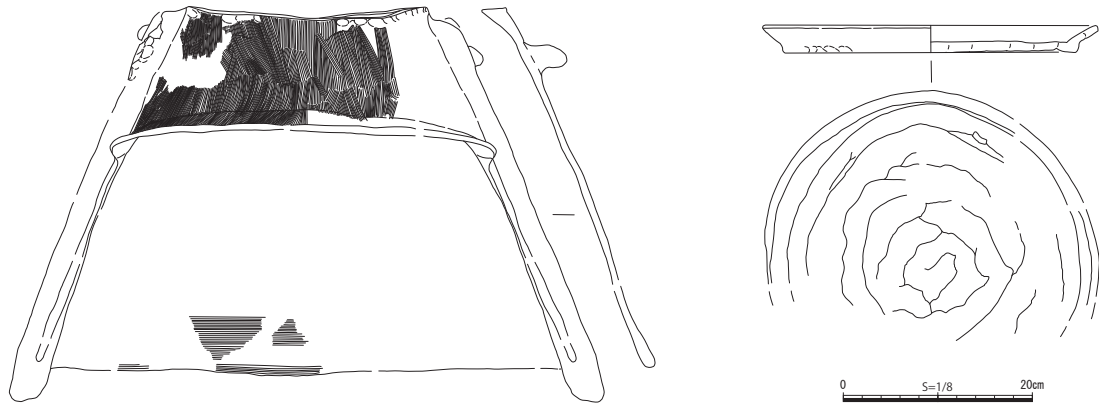
一方、柵口地区東側の丘陵先端部に展開した江古山遺跡には、稜線付近に古墳時代開始期の方形周溝墓 1 基や 5 世紀末葉から 6 世紀前葉の方墳 3 基が造られた後、7 世紀前半から 8 世紀代を通じて、丘陵の東



第4図 伊保谷の遺跡分布図

側斜面に竪穴建物 29 棟と少数の掘立柱建物からなる集落が営まれた。特徴的な遺物としては、古代の移動式カマドの破片が 60 点近く出土している。西三河の矢作川流域は、尾張や東三河に比べて移動式カマドの出土例が多いが、本遺跡の出土数はその中でも群を抜いて多い。移動式カマドは 5 世紀中葉に日本にやってきた百済系渡来人の土器製作技術を受けて、大阪府の生駒山西麓地域や河内湖北岸において創出された可能性が高いとされるが（中野 2018）、矢作川流域に出現するのはようやく 7 世紀に入ってからのことで、畿内から近江を経由して伝播してきた可能性がある（森 2020a）。江古山遺跡の移動式カマドは、集落が営まれた 7・8 世紀のほぼ全時期を通じて使用されているが、方形周溝墓や方墳の周溝からも多数の移動式カマドの破片が出土しており、墓前において移動式カマドをもちいた炊飯や直会的な儀礼が行われた後に、周溝内に廃棄されたものとみられる。古墳の周溝などからは 6 点の製塩土器も出土し、いずれの遺構においても移動式カマドが共伴していた。製塩土器に入れたまま運ばれた堅塩は、特別な塩として食に関わる儀礼などの場面でももちいられていた可能性が高い（森 2015）。先祖の長の墓を抱えた江古山遺跡の人々にとっては、移動式カマドをもちいる機会がとくに多くあり、それに伴って堅塩を必要とするともあったと思われる。

さらに、性格不明遺構 SX03 からは、全形が復元された移動式カマドと共に、盤状の土製品が、7 世紀末葉の須恵器を伴って出土した（第 5 図）。口径 36cm、器高 3cm の大きさで、底部外面には中心から粘土紐をつないで螺旋状に巻き上げた痕跡がはっきりと残っている。国内では今のところ類例を見ないが、朝鮮半島の新羅の都があった慶州の北方約 30km に位置する冷水里古墳の横穴式石室から移動式カマドと共に出土した軟質土器の「盤」との類似性が高い。この古墳では、6 世紀前半から 7 世紀にかけて 3 時期にわたる埋葬が行われている。移動式カマドの副葬や盤の存在は、新羅における在地の系譜としては理解しがたく、朝鮮半島におけるカマド祭祀の中心地であった加耶や高句麗の影響を受けていたことが想定さ



第5図 江古山遺跡の移動式カマドと盤

れている（森本 1996・中野 2018）。冷水里古墳には三累環頭大刀柄頭や角杯など、古墳時代後期の「賀茂」においても確認される特筆すべき資料が副葬されていて、非常に興味深い。移動式カマドや盤の存在は、「賀茂」や伊保谷と渡来系集団との関わりを想起させる。

伊保谷周辺で調査された集落は今のところこの2遺跡に限られるが、江古山遺跡よりも北側の丘陵上に位置した矢遠古墳の調査では、7世紀末葉から8世紀代の遺物と共に竪穴建物の一部が検出されている（田端 1977）。この時期には江古山遺跡同様に、小規模な集落が丘陵上の高地に立地していた可能性が高い。

## (2) 古墳

ここでは、「北部」と「伊保谷」に大別される伊保川流域古墳群を紹介する。伊保川が狭長な谷底平野を伴いながら南流する間の北部には17基、東へ大きく向きを変えた伊保谷には22基の計39基の古墳が分布している。

北部の最上流域の割田川付近には、6世紀中葉から7世紀後葉に築造された来姓古墳群9基があった。直径10～15mの円墳で、いずれも小規模な横穴式石室を有していた。本古墳群から尾根を越えた北側の瀬戸市域にも、6世紀中葉から吉田奥古墳群などが展開している。

来姓古墳群の南方には、南流する伊保川に注ぎ込む支流に面して後期古墳が点在するが、6世紀後葉に築造されたキヨツカ2号墳からは鉄製の轡や鐙鞆、金銅張りの飾金具からなる馬具が出土した。こうした北部の古墳は、伊保川に流れ込む小河川沿いの開発にあたった集団の中の有力者の墓とみられる。

一方、伊保谷両側の丘陵や段丘上に展開する古墳のうち、伊保谷北側には江古山遺跡や根川古墳群をはじめとする5世紀末葉から7世紀後葉の古墳20基がある。この中で最も古い古墳は、5世紀末葉と推定される江古山遺跡の方墳SZ02で、6世紀前葉にはSZ03・04が築造されている。3基ともに周溝が検出されたのみの一辺8m前後の小規模な方墳で、木棺直葬などが想定される。SZ03・04には淡輪系円筒埴輪が巡らされており、矢作川流域では最奥部の出土例となっている。一方、伊保遺跡四反田地区の北東約150mに位置する六反田地区C地点では円墳（六反田古墳）の周溝とみられる溝が検出されている。6世紀前葉の須恵器や淡輪系円筒埴輪が出土するとともに、江古山遺跡にはない形象埴輪を有していた。

さらに6世紀中葉までには伝統的な竪穴系埋葬施設をもつ根川3号墳が築かれたとみられるが（森

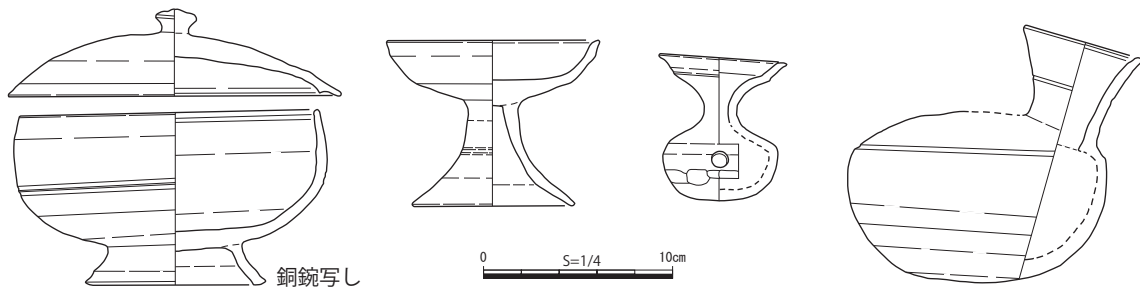
2020a)、同中葉には根川1号墳、山洞2号墳の無袖形石室をもつ古墳が築造された。馬具をはじめとする豊富な副葬品が出土した根川1号墳以外は、いずれも直径10mに満たない小規模な円墳とみられる。市内では6世紀中葉に無袖形石室をもつ古墳が同時多発的に築造されたが、伊保川流域も同じ状況を示している。この時期になると方墳は姿を消し、円墳に統一されていく。続く6世紀後葉には、根川2号墳や馬具を出土した山洞3号墳(森2018a)が築かれている。市内で馬具を出土した古墳は8基を数えるのみであるが、先述した根川1号墳とキョツカ2号墳を加えると、伊保川流域では6世紀後半の3基の古墳が馬具を有していたことになり、大きな特徴となっている。

6世紀代の古墳のうち、首長墓としての姿をひときわ強く示しているのは根川1号墳である。明治18(1885)年に村人によって発掘され、この時発見された遺物は、一部が宮内省に献納されるなどした他は埋め戻されたという。遺物は昭和22年に再発掘された後、再び埋め戻されている。近年行われた根川1・2号墳の発掘調査では、1号墳は6世紀中葉のうちでも新しい段階に築造された直径16~17mの円墳で、埋葬施設は小型の無袖形石室、2号墳は6世紀後葉に築造された直径17mの円墳で、最大幅2mの比較的規模の大きな擬似両袖形石室をもつことがあきらかとなった。1号墳から出土した埴輪は胎土や焼成具合からみて、後述する上向イ田窯で作られたものと考えられるが、発掘調査が行われた同3・4号窯の製品と比べると、製作手順が省略された個体が一定数認められるなど、やや新しい要素がみられる。また、1号墳に埋め戻されていた副葬品の中には3組の馬具が含まれていた。市内で複数の馬具を出土した古墳は他に豊田大塚古墳があるのみで、3組もの馬具の副葬は県内でも類例を見ない。馬具はいずれも鉄製で、それも鞍や鐙などを伴わず、轡とそれを馬頭部に固定するための面繫のみのシンプルな構成である点が大きな特徴となっている。副葬品のうち長い兵庫鎖を取り付けた兵庫鎖立聞素環環状鏡板付轡や三角穂式鉄鉾などは、その誕生に6世紀前半の王権である継体朝の強い関与があったと指摘されるもので、有力首長墓に副葬された資料である(齋藤2015・2020)。また、西日本に分布の中心をもつ斑点文ガラス玉(トンボ玉)の存在も特筆される。7個体もの提瓶をはじめとする数多くの須恵器や、大刀などの武器、豊富な装身具なども、被葬者が伊保谷の盟主であったことを存分に伝えている。2号墳は盗掘により副葬品の全貌は不明であるが、伊保川流域の古墳の中ではいち早く擬似両袖形石室を導入していたことがあきらかとなった。伊保谷を直接視野に収める丘陵先端部に、伊保谷の中でも盟主的な首長墳が築かれたことになる(森2018a)。

7世紀前半の古墳は、伊保谷を直接視野に収めることが難しくなる北方の丘陵奥部の山洞・南沢古墳群で確認されている。その後の7世紀後葉にも、伊保川流域の北部を中心に古墳築造は続いているが、注目すべきは伊保谷の矢遠古墳である。西三河の古墳は7世紀後半になると墳丘・石室ともに縮小していくが、矢遠古墳はこの時期としては規模の大きな直径20m近い墳丘をもち、横穴式石室も全長9.8mに及ぶ大型で、終末期の有力墳に特有の細長い胴張り形の玄室をもつ擬似両袖形石室である(森1999)。盗掘によって副葬品の全容は不明であるが、銅鏡写しの須恵器(第6図)の存在が注目され、7世紀後葉の伊保谷に有力墳が築造されていたことを伝えている。

一方、伊保谷を南から見下ろす伊保川右岸、伊保廃寺のすぐ南側の段丘上には古墳が極端に少なく、昭和初期に愛知少年院周辺の山道が開削された際に出土したと伝わる7世紀末葉の須恵器<sup>2)</sup>を残す少年院





第6図 矢遠古墳出土須恵器

前塚古墳など2基を数えるのみである。古くからその理由が問われてきたが（吉田1964）、西三河の横穴式石室がおおむね西から南方向に開口させる緩やかなルールにしたがって造られていたとすると（森2020b）、被葬者たちの生活基盤である伊保谷方向に石室を開口させるには、伊保谷の南側は古墳の選地として不向きであったと考えられる。このことから、伊保谷周辺に点在するこれらの古墳は、伊保谷を社会的・経済的な基盤としていた集団の有力者の墓であったと考えて良いだろう。

なお、伊保川右岸には、7世紀末葉ごろの建立とみられる伊保廃寺がある。伊保谷北側の後期古墳群や江古山遺跡など高地の集落、式内社である射穂（伊保）神社からは、伊保川を隔てて南に遠望できる位置にある。また、例外的な選地となる少年院前塚古墳を除くと、伊保谷では古墳時代の最終末期（7世紀末葉～8世紀初頭）に築造された古墳は確認されていない。

## 4. 亀首谷の遺跡

### (1) 集落

亀首谷のうち、猿投山を水源とする籠川が加納川と合流する地点までを籠川上流域、そこから伊保川との合流点までを同中流域とする。そして矢作川に合流するまでの間を同下流域として、遺跡の動向をみていく（第3図）。

亀首谷のうち、数多くの後期古墳が分布する上流域では、今のところ集落遺跡は確認されていない。中流域では亀首遺跡において、弥生時代終末期を中心とする遺物が多数確認されている。これまでの調査で1棟のみ確認された竪穴建物は5世紀代のもので、その他には中世の掘立柱建物3棟が確認されている。自然流路などからは、古墳時代中期の土師器、5世紀後半の須恵器や主に9世紀以降の須恵器や灰釉陶器なども出土している。この遺跡は従来から亀首谷西側の丘陵に展開する上向イ田窯（6世紀中葉と7世紀代の操業を確認／後述）との関係が想定されてきたが、当該期の遺構・遺物は確認されていない。中流域南端付近や下流域には、5世紀前葉の大洪水の後に一旦断絶した後、7世紀前半に復興した新金山遺跡や、6世紀後葉に復興した梅坪遺跡がある。両遺跡では復興してから8世紀初頭までに、合わせて65基以上の竪穴建物が確認されている。中でも梅坪遺跡は、弥生時代後・終末期や古墳時代前・中期の4世紀代から5世紀前葉に盛期を迎えた後、7世紀代から8世紀初頭にかけては大型の壁立式竪穴建物・総柱建物からなる首長居宅や、それに伴う大型の総柱建物（倉庫）群が建ち並び（第7図／永井2016／森2020a）、

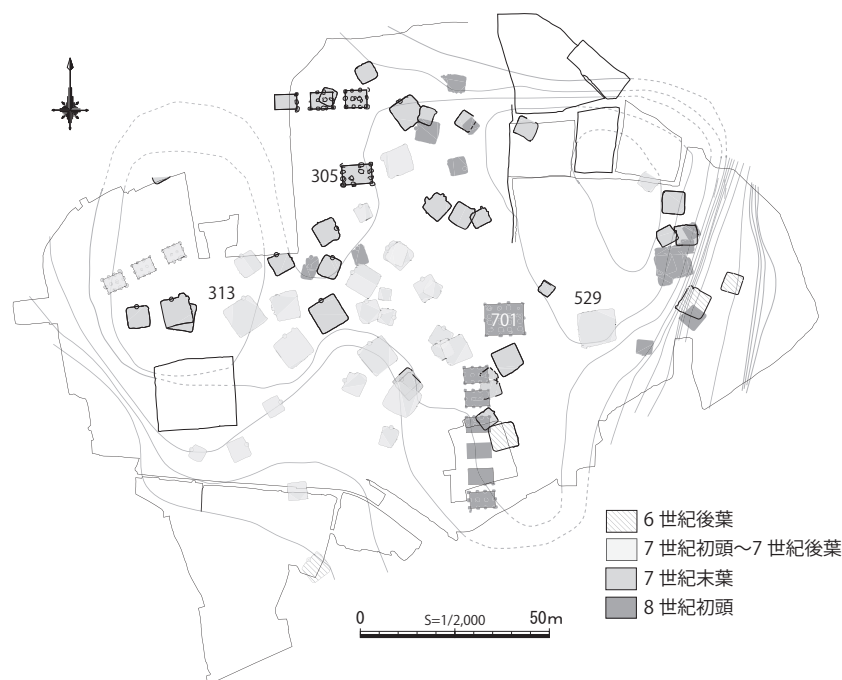
籠川流域の中で最も拠点的な集落となっている。矢作川と籠川の合流点付近という交通の要衝に立地した梅坪遺跡が大型の倉庫群を有し、海岸部で塩生産にもちいられた製塩土器が内陸部の遺跡としては格段に多く出土していることなども踏まえれば、本遺跡は「賀茂」の中で物資の集散地としての性格を強くもち、大きな権益を有していたとみられる。

また、本遺跡からは須恵器の角杯が2点出土している（第8図）。角杯は北方騎馬民族であるスキタイの文化に起源をもち、盟約を交わす際にもちいられた酒器とされる（門田 2001）。角杯は土器生産の中では極めてまれな存在で、大阪府の陶邑窯では一点も確認されていない。全国では20余りの遺跡から出土しているが、本例は国内では最も東から出土した事例となっている。胎土・焼成の状況から猿投窯の製品と考えて差し支えないだろう。使用方法は不明であるが、底部外面があきらかに摩滅しているため、繰り返し利用されていたとみられる。国内で出土した角杯の大半は6世紀前半に属するが、本遺跡の角杯はおよそ7世紀前半に位置づけられ、同後半まで大切に使用されていた可能性もある（森 2021a）。物流の拠点として活況を呈していた7世紀から8世紀初頭の梅坪遺跡では、人や情報も盛んに往来していたであろう。本遺跡に居住していた首長の配下にあつて角杯の使い方を知っていた渡来系の人物、あるいはその意義を理解していた「賀茂」の人間が猿投窯で角杯を焼かせ、何らかの特別な儀礼を行っていたことを想像させる。

## (2) 古墳

籠川流域に所在する古墳は、亀首谷に属する上流域21基と中流域1基（本郷古墳）、亀首谷から外れた中流域2基と下流域5基の計29基があり、基数・時期ともにそれぞれ際だった違いを見せている。

中流域の3基のうち北野古墳は直径約20mの円墳で、竪穴系の埋葬施設をもつ前・中期古墳となる可



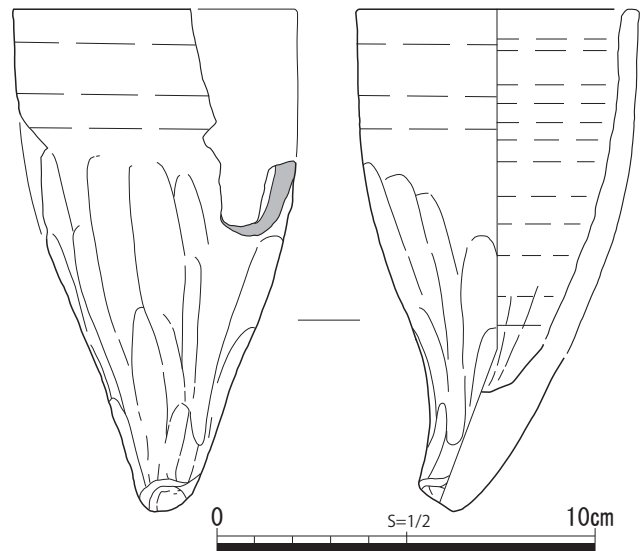
第7図 梅坪遺跡における古墳時代後期の主要建物分布図

能性が指摘されている。東山古墳は、昭和48年刊行の『豊田市遺跡分布調査報告書』に「直径16mほどの円墳」「石室のものと思われる石材が散乱」「大正年間に須恵器や円筒埴輪が出土したとされるが所在不明」とあるが、最後の記述は地名の混乱から生じていた可能性も高く<sup>3)</sup>、亀首谷の本郷古墳と共に詳細不明である。下流域の古墳は5基を数え、左岸の最大幅1kmほどの広い平野部を見下ろす段丘縁辺部には、4世紀後半に舶載の内行花文鏡を出土した宇津木古墳、5世紀前葉と後葉に井上1・2号墳が築かれている。宇津木古墳から南東0.8kmの段丘縁辺部にある小笹古墳もまた中期古墳である可能性が高い。

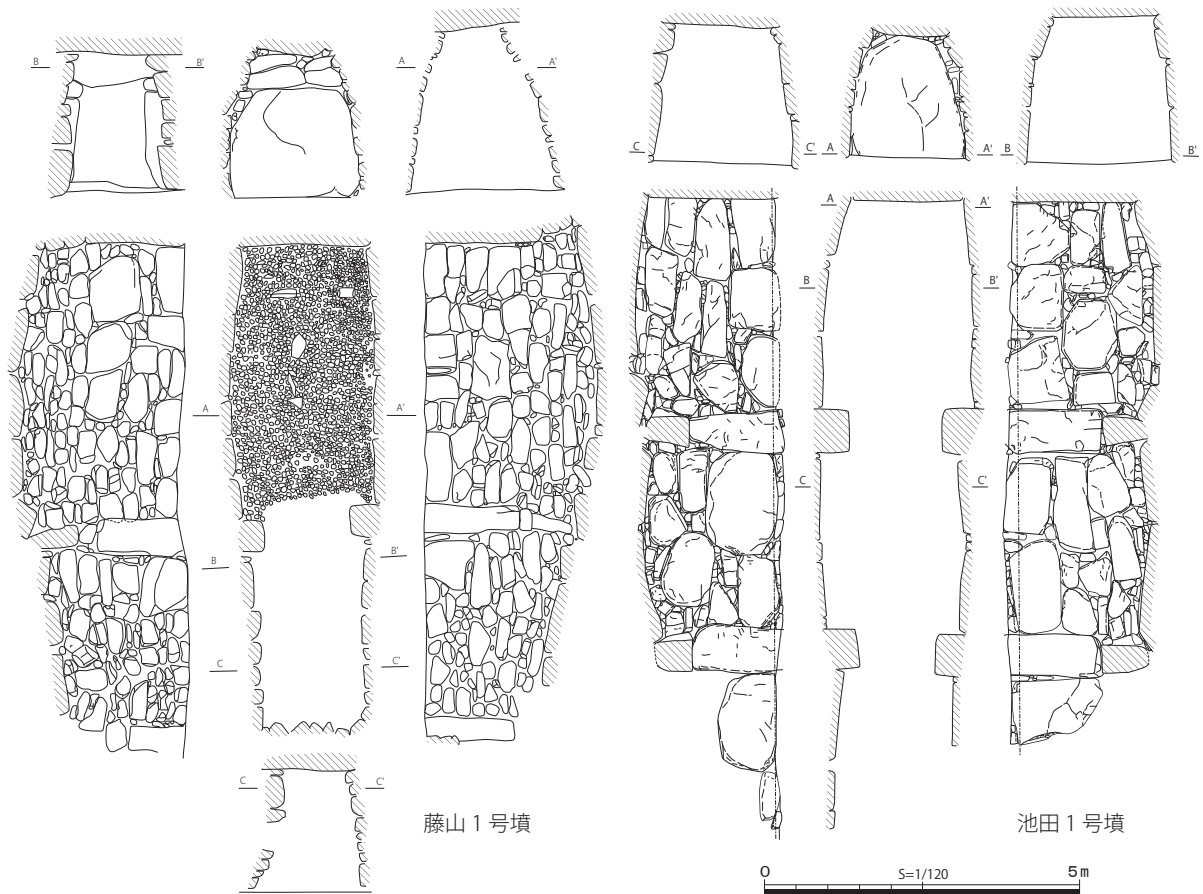
また、梅坪遺跡周辺の後期古墳としては、遺跡北側の一段高い段丘上に京町藤塚古墳が確認されているのみである。直径約16mの円墳で、周溝から7世紀前半の須恵器が出土しているが、古墳時代後期に盛期を迎えた梅坪遺跡に対応する古墳としては、数・内容ともにあまりに乏しい。

一方、亀首谷の古墳群の中心となる籠川上流域には21基の古墳が分布しており、さらにその谷奥には式内社であり、西三河屈指の大社である猿投神社が位置している。調査された、もしくは時期が判明する古墳は10基に満たないが、今のところ最古の古墳は、籠川右岸の加納川沿いの奥部にあった寄元3号墳で、築造時期は6世紀中葉から後葉の過渡期に位置づけられる。伊保谷に比べると古墳の出現は遅れている。続く6世紀後葉には、広沢1号墳・上ノ段古墳・藤山1号墳が確認される。中でも加納川の下流域に位置する藤山1号墳は直径22mの円墳で、後期古墳としては規模の大きな墳丘をもつ。複室構造の擬似両袖形石室（第9図）の全長は少なくとも11.2m以上と想定され、市内最大級の横穴式石室である。石室は古くから開口しており、床面清掃時に須恵器や武器・装身具などが出土している。大型の管玉・勾玉などはいずれも優品であり、亀首谷の盟主墳といえる。本墳に続く盟主墳は、籠川を隔てて東1.2kmに位置する池田1号墳で、外護列石が二重に巡る2段築成、直径19mの円墳である。昭和8年の砂防工事で開口したという横穴式石室（第9図）は、藤山1号墳と同じく複室構造の擬似両袖形で、羨道前方が失われたものの石室の残存長は9.9mに及ぶ。側壁に長辺1.5mを超える花こう岩の巨石をもちいており、石室に入ったときの空間の大きさは市内随一である。石室の形状から、7世紀初頭から前葉あたりの築造と考えられる。池田古墳群3基は200～300mの距離を置いて独立して築かれており、未調査の2・3号墳はともに直径20m前後の大きな墳丘を有している。

過去の記録をみると、直径10m前後の円墳と考えられる藤山2～4号墳のうちの1基から7世紀前半頃の、最も上流部の左岸にあった地家1号墳から7世紀後半頃の須恵器が出土している。また、籠川上流域にあたる加納川沿いの奥部に築かれた寄元4号墳は8世紀初頭築造の最終末期の古墳で、全長2.1m、最大幅1mの小型の擬似両袖形石室を有していた。



第8図 梅坪遺跡出土角杯形須恵器



第9図 亀首谷の首長墳の横穴式石室

亀首谷の古墳も伊保谷同様に直径10m前後の円墳を主体としてはいるが、藤山1号墳と池田古墳群の3基はいずれも直径20m前後であきらかに規模が大きく、しかも藤山1号墳と池田1号墳は複室構造の擬似両袖形石室を有している。将来的に池田2・3号墳の内容があきらかになれば、藤山1号墳や池田1号墳を含めた亀首谷の首長墓の系譜をたどることができるようになるだろう。これらの首長墓の被葬者は、6世紀後葉から7世紀代に籠川流域もしくはさらに広い範囲の統治に関与していた首長であったと想定される。

籠川流域の古墳と集落の関係性をみると、古墳時代前期後半から中期に盛期を迎えていた梅坪遺跡の有力者は、北東に約1.7km離れた籠川下流域の段丘上に位置する宇津木古墳や井上1・2号墳に葬られたと想定される（森2008）。後期になっても遺跡周辺にはごくわずかの古墳しか築かれていないため、後期の梅坪遺跡に居住した首長や有力者たちは、籠川をさらに奥へとさかのぼった上流域に墓域を定めた可能性がある。もちろん、亀首谷の籠川上流域古墳群の築造母体を梅坪遺跡のみに限る必要はなく、現状では確認できていない亀首谷を含めた複数集団による墓域であった可能性を考えておく必要もあるだろう。

なお、池田2号墳の南1.2kmには、7世紀後半から奈良時代にかけて舞木廃寺の伽藍が整備されている。また、籠川上流域の寄元4号墳以外には、今のところ7世紀末葉以降に築造された古墳は確認できない。7世紀末葉から8世紀初頭にも多数の古墳が築造された矢作川東岸の高橋中南部地区などとは対照的であり、基本的には伊保谷の古墳時代最終末期の状況に近いと言える。

### (3) 古窯

籠川に注ぎ込む本徳川沿いの樹枝状に開析された丘陵先端付近に、上向イ田窯7基が確認されている。発掘調査された3号1次窯と4号窯が6世紀中葉、3号2次窯が7世紀前半の操業である。採集遺物から1号窯は鎌倉時代、2号窯は7世紀後半頃か鎌倉時代、5・6号窯は7世紀前半頃に操業していたと考えられる。3号1次窯と4号窯は、現在でも西三河で発見された最古の窯跡である。窯跡群の全体像はあきらかではないが、上向イ田窯では過去に5世紀後葉と思われる須恵器も採集されているため、古墳時代に一定期間操業を続けていた可能性もある。6世紀中葉と7世紀前半の須恵器は猿投窯（東山窯）の製品に酷似しており、窯体平面形が短冊形であることも共通している。また、昭和43年刊行の『猿投町誌』によれば、3号窯の北約1.3kmにあった源内2号窯でも7世紀前半頃の須恵器が採集されており、古墳時代後期の上向イ田窯周辺の丘陵には、窯焚きの煙が頻繁に上がっていたと想像される。また、3号1次窯と4号窯は須恵器のみならず、円筒埴輪と形象埴輪も焼成していた。同じ窯で須恵器と埴輪を焼成するのは猿投窯の特徴の1つであり、6世紀中葉に猿投窯系の須恵器と尾張型埴輪を焼成した窯は、尾張では名古屋市東山窯、春日井市下原窯、尾張旭市卓ヶ洞窯の3窯、三河では上向イ田窯のみである。矢作川流域の西三河に位置しながら、尾張と接する伊保の北東に上向イ田窯を開窯させるにあたっては、尾張の工人から須恵器・埴輪の製作技法や、焼成に関する技術移植を受けたことはあきらかである。

## 5. 遺跡動向からみえる地域社会

伊保谷の中心に位置する伊保遺跡と、亀首谷に展開する古墳群の築造主体とみられる梅坪遺跡を比較してみると、両者の盛衰はおおむね表裏の関係にあったようにみえる（森2008）。俯瞰して見れば、両者は籠川を介した地理的な近縁性もしくは共同体的な関係をもっていたと言えるだろう。

伊保谷に根川3号墳が築造され、1号墳の被葬者が活躍したと考えられる6世紀前葉から中葉は、伊保遺跡が盛期を迎えていた時期と合致している。加えてこの時期には、根川古墳群の北東1.7km付近で上向イ田窯が操業していた。上向イ田窯は、周辺の伊保谷や亀首谷、さらには「賀茂」において増加しつつあった後期古墳や集落からの需要に応じて製品を供給していたとみられる。有力墳にのみ並べられる埴輪を焼成していたことから、その開窯や操業に在地首長が関与していたことは間違いないだろう。根川1号墳の被葬者が活躍していた時代は、まさに上向イ田3・4号窯が操業していた時期にあたるため、本墳の被葬者は上向イ田窯の操業や製品流通に強い関わりをもっていたと考えられる。

上向イ田窯で焼成された須恵器や埴輪の具体的な流通ルートは定かではないが、例えば近世においては、籠川と矢作川の合流地点を1.5kmさかのぼった矢作川西岸に越戸土場があり（第3図）、岐阜県恵那市付近を治めた岩村藩の年貢米を江戸へ送る際や、来姓古墳群のある八草村から米を搬出する際には、陸路で越戸まで運び、そこから矢作川を介して河口部まで運び出していた。こうしたことをも勘案してみると、上向イ田窯の製品を窯場から矢作川まで運び出すにあたっては、おそらく陸路が使われていて、そこでは馬が大きな役割を果たしていたと考えられる。越戸土場の北西0.3kmには式内社の灰寶神社があり、その祭神が陶磁器の祖神ともされる波爾安比咩命（埴安姫尊）であることから、矢作川の積出港付近に鎮座

するこの神社の位置が窯業製品の生産と輸送に深い関わりをもつ場所であったとする意見もある（田端 1993）。上向イ田窯の埴輪は南約 9km に位置する高根 1 号墳にも供給されているため、矢作川を介した流通が行われていたことは間違いないだろう。また、伊保川流域の古墳 39 基のうち 6 世紀後半の 3 基の古墳から馬具が出土していることも注目に値する。根川 1 号墳の 3 組の馬具がきらびやかな金銅装ではなく、全て実用的な鉄製馬具であったことは、根川 1 号墳の被葬者が馬を利用した社会的・経済的な活動に関与していたことを伝えているかのようである。

市域南部の「碧海」では、6 世紀前半に活躍した豊田大塚古墳の被葬者が継体朝やそこに連なる首長層とのネットワークを構築しており、その背景には尾張の首長層との強力なつながりがあったと推定される（森 2018b）。「賀茂」は西三河の中でも尾張との結びつきが強く、例えば 16 世紀後半に尾張の織田信長が市域の矢作川西岸を支配下に置くと、そこは「高橋郡」と呼ばれる尾張と三河に両属するような状態となり、実際に「尾張国高橋郡」と記された史料も存在する。もちろん、時代によってその関係性は大きく異なっていたはずであるが、「賀茂」では遅くとも 6 世紀中葉に猿投窯系の須恵器や尾張型埴輪を導入・生産し、それらを「賀茂」一円に広く流通させていたことから、6 世紀代の「賀茂」の首長は尾張と極めて強い結び付きを有していたとみられる。それに際して大きな役割を担っていたのが、伊保谷の首長だったと言えるのではないだろうか。尾張から三河、そして南信へと至る近世の伊那街道の原形がいつごろ成立したのかは不明であるが、伊保谷は尾張から三河に入る、まさにその玄関口にあたる。根川 1 号墳の 3 組もの鉄製馬具が象徴的に伝えているように、伊保谷の首長は交通路や馬を介した流通に参画することで、豊田大塚古墳の被葬者と同様に、尾張勢力との強い関係性をもち得ていたのではないか。根川古墳群の被葬者は、上向イ田窯の生産とその製品の流通をはじめとして、伊保谷やその周辺を経由する人・モノ・情報などを掌握していたようにみえる。こうした社会的・経済的な基盤を確保し、さらに尾張との関係を通してヤマト政権とつながることで、継体朝が関与した特徴的な馬具や三角穂式鉄鉾などを入手し、伊保谷の盟主としての存在感を放っていたと考えられる。

一方、7 世紀に入ると、籠川下流域の梅坪遺跡や矢作川対岸の高橋遺跡が盛期を迎えており、伊保谷に比べると大型建物の存在などによって首長の存在が顕在化している。亀首谷における古墳時代後期の集落遺跡の状況が不明確な現状では判断が難しいが、亀首谷には 6 世紀後葉から複室構造の横穴式石室をもつ首長墳が築かれており、古墳築造の状況からは、伊保谷から亀首谷へ勢力の中心が移動したようにみえるのである。

## 6. 文献資料からみた在地首長

『古事記』に記された三河に関わる氏族名は、西三河では垂仁天皇段の「三川の衣君」が唯一の存在である。同じ垂仁天皇段には「許呂母之別」もあり、彼らは「賀茂」の中で名が記された最古の首長名と言える（西宮 2020）。『古事記』に「衣君」「許呂母之別」の歴史的事象が記されているわけではないため、そこに考古学の成果を接続させるのは容易ではないが、仮にコロモの地名を冠した首長が 7 世紀代に実在していたとすると、6 世紀後葉以降に大型の複室構造の横穴式石室が連なる亀首谷を墓所とした可能性が

高い、梅坪遺跡に居を構えた首長が有力候補の1人に挙げられるだろう。明瞭なランク差をもつ横穴式石室には「家格」のようなものを表示する役割があり（菱田 2014）、大型横穴式石室の被葬者に地方豪族の頂点に位置する「君」や「直」などをあてる考え方もある（田村 2009）。また、『先代旧事本紀』は史料批判も必要となるが、その一部をなす「天皇本紀」には景行天皇の皇子として五十功彦命が挙げられ、「三川三保君祖」と記されている。この「三保」は「伊保」と音訓相似であるとして、のちの伊保郷との関連を想定する意見が古くからある（太田 1926）。もしもこの想定が正しければ、三川三保君は伊保谷を支配していた在地首長に他ならず、考古学的に見出される遺跡群のまとまりや空間からすれば、魅力的な解釈ではある。筆者にこうした意見の当否を判断する能力はないが、7世紀の「賀茂」にこうした有力氏族が盤踞していたことは、考古学的な成果からも十分に説明が可能である。

## 7. 古墳の終焉と寺院の創建

7世紀後半以降になると、「賀茂」の古墳は横穴式石室が小型化し、単葬墓へ変化していくが、これらは汎列島的な現象であった。その背景には大化の薄葬令や新たな身分制度、寺院の建立や葬送観念の変質などがあったとみられる。「賀茂」では主に7世紀に入ると、集落や経済基盤となった場所から距離を置いた背後の丘陵などに後期古墳がまとまって築かれるようになり、伊保谷では山洞・南沢古墳群、亀首谷では地家・神郷古墳群などが該当する。しかし、伊保谷・亀首谷ともに、7世紀後半に入ると古墳の築造は低調になったように見える。その一方で、矢作川東岸の豊田盆地周縁部などでは、8世紀初頭まで前代とさほど変わらない数の古墳が築造された後、古墳築造は唐突に終わりを迎えている。広く西三河に目を向けても、横穴式石室をもつ古墳は8世紀初頭を最後にほぼ途絶え、その後はわずかに小石室が確認されるのみとなる。つまり、奈良時代の開始と前後する時期に、西三河でおよそ250年間にもわたってその構築技術が継承され、他地域にも影響を及ぼし続けてきた横穴式石室という埋葬施設自体が、ほぼ一斉に姿を消したのであった（森 2020b）。伝統的な習俗であった古墳築造を停止するという判断をさせるほど、律令国家の政策や施策は強力に地方にも及んでいたのであり、古墳の終焉は律令国家の強い規制の下で否応なく行われたものであったとみるべきであろう。

こうした古墳の終末に向かう動きと重なりながら、7世紀後半には「賀茂」においても仏教寺院が建立されるようになった。寺院は権威や秩序を目にみえるかたちで表現する新たなモニュメントにもなったため、在地首長たちはその権勢を示すために競って寺院を建立したと考えられる。7世紀後半の「賀茂」では古墳は未だ盛んに築造されており、新古のモニュメントがあきらかに共存していた。こうした現象は「賀茂」に限ったことではなく、西三河を含む各地で認められる。

では、古墳の地域的なまとまりと寺院の立地はどのように関係しているのだろうか。例えば亀首谷の籠川上流域では、古墳群の南端に位置し、首長墓系譜が想定される池田2号墳の南1.2kmの丘陵先端部に舞木廃寺が造営されている（第3図）。塔心礎が残り、鴟尾や青銅製の風鐸なども出土している有力寺院である。本寺周辺に後期古墳は確認されていないが、籠川上流域の古墳群と同じ亀首谷の連なりの中にあるため、上流域に有力墳を築いた在地の有力首長が氏寺として寺院を建立した可能性が高い。市域では後

期古墳群の至近に古代寺院が建立されている事例はみられず（第2図）、その傾向は県内においても同様である。「賀茂」では籠川流域と同じように、有力な後期古墳からやや距離を置きつつ、関連性の高い場所に古代寺院が造営されることが多い。伊保谷の矢遠古墳と伊保廃寺、高橋中南部地区の山ノ神古墳と勸学院文護寺跡などは、それぞれが1km余りを隔てた場所に立地しており、古墳と寺院は異なる原理で造られていたことが分かる。

また、「賀茂」の古代寺院に葺かれた軒丸瓦の特徴は、古代の碧海郡（青見評）に位置する岡崎市北野廃寺の系譜を引く寺院と、川原寺式軒丸瓦から派生した複弁六弁蓮華文をもちいる寺院とに大別される。前者の瓦が葺かれた寺院の建立は7世紀第3四半期、後者の瓦が葺かれた寺院の建立は7世紀第4四半期と想定されている（永井2011）。亀首谷の舞木廃寺の中心的な軒丸瓦は複弁六弁蓮華文であるが、北野廃寺系の軒丸瓦も1点採集されており、塔以外の建物が先行して造営されていたとみられる（永井2020）。北野廃寺系軒丸瓦の製作技法は、平戸橋町の上小田古瓦出土地の軒丸瓦にも影響を与えており（森1994）、「賀茂」における寺院造営は、青見評からの技術支援などを受けて始まった可能性が高い。

一方、7世紀第4四半期と想定される川原寺系の複弁六弁蓮華文軒丸瓦がもちいられた古代寺院は「賀茂」にのみ分布していて、この形式の瓦は賀茂郡系軒丸瓦と呼称されている（永井2017）。この瓦は矢作川に隔てられることなく両岸に広がっており、あたかも軒丸瓦に「賀茂」というまとまりが表現されているかのようにみえる。7世紀末葉の「賀茂」の古墳に独自の特徴を見出すことは困難であるが、古墳という旧来のモニュメントには表れていなかった「賀茂」というまとまりが、寺院という新たなモニュメントを通して浮かび上がってきた感がある。これは、7世紀中ごろの評制の施行によって国造が支配していた領域が解体され、鴨評という新しい行政単位が明確にされたことと連動する事象であったのだろうか。

伊保廃寺、そして舞木廃寺の大部分の建物の軒先を飾っていたのは、その賀茂郡系軒丸瓦であった。この2つの寺が建立された伊保谷・亀首谷では、7世紀末葉以降の古墳がごく少数となる。こうした事象を積極的に評価するならば、社会が大きな変革を迎える中で、矢作川西岸の伊保谷や亀首谷に関与した有力首長は、「賀茂」の中ではいち早く、古墳築造を基本的には停止し、寺院の造営へと舵を切っていたのかもしれない。

## 8. まとめにかえて

伊保谷と亀首谷の古墳を比較すると、6世紀後葉を境として有力墳が伊保谷よりも亀首谷に築かれるようにみえることは、先に述べたとおりである。6世紀後葉以降に有力墳が連なる亀首谷には、7世紀後葉（第3四半期）におそらく「賀茂」初の寺院である舞木廃寺の堂が建立され、その後に塔などが整備されていた可能性が高い。それを氏寺として造営した首長に関わる集落の1つが梅坪遺跡であったとみられる。亀首谷よりも早く6世紀後半に有力墳が築かれた伊保谷において、7世紀代の拠点的な集落は現状不明なもの、7世紀後葉に有力墳である矢遠古墳、同末葉に伊保廃寺が造営されている。7世紀における古墳や寺院の造営は伊保谷よりも亀首谷が優位に立っていたが、伊保谷にもやや遅れながらも新たなモニュメントとして伊保廃寺が創建されたのであり、7世紀後半の伊保谷に有力な勢力が存在していたことを伝えて

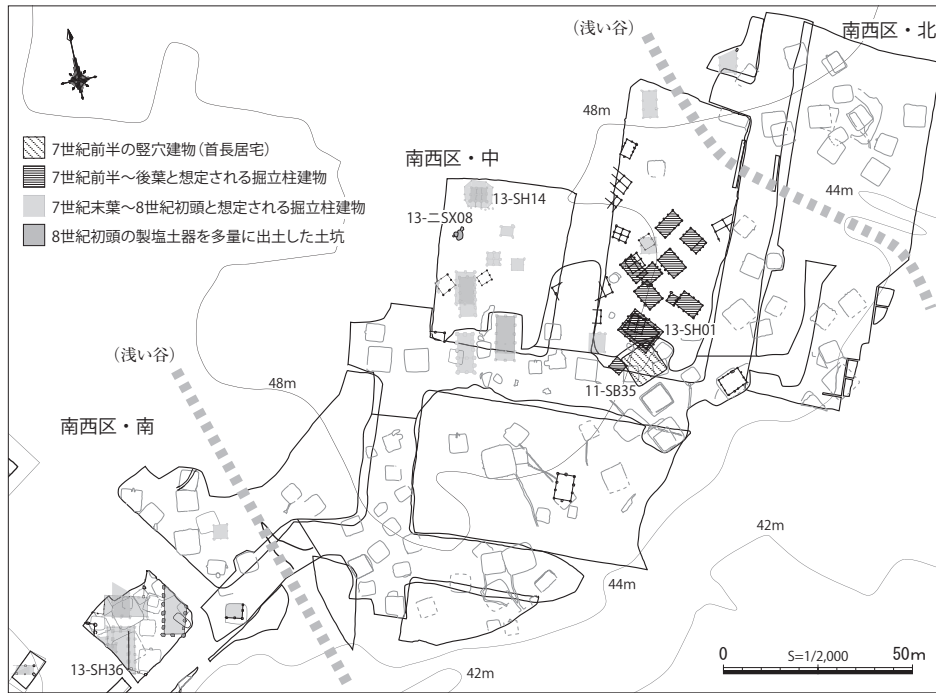


いる。

伊保谷の江古山遺跡で7世紀末葉の墓前祭祀にもちいられたとみられる移動式カマドと盤は、半島由来の遺物であった可能性が高い。また、梅坪遺跡から出土した7世紀代の角杯も、渡来系文化が何らかの形で受容されていたことを物語っている。渡来系の人物もしくはその知識を得た人間が「賀茂」という地域社会の運営にさまざまに関わっていたとすると、彼らが7世紀後半の寺院造営に無関係であったとも思えない。全くの想像でしかないが、伊保廃寺が平瓦を立て並べた特殊な基壇外装を有していたことは、こうした視点からも考えてみる必要があるかもしれない。

もう1つの問題として、古墳時代終末期の7世紀末葉に伊保廃寺などの寺院を創建したのは、在地首長(有力な伝統的氏族)であったのか、それとも7世紀後半の国造制から評制への移行に伴い頭角を現したとされる新興氏族であったのだろうか。伊保谷では、7世紀後葉(第3四半期)に最後の首長墳とも言うべき矢遠古墳が築造された後、第4四半期に伊保廃寺が造営されたとみられる。6世紀後半の根川1・2号墳と7世紀後葉の矢遠古墳の間をつなぐ有力墳は今のところ未確認であるが、そこに連続性を想定すれば、伊保谷に相応の勢力が存在し続けていたことになる。逆に有力墳が一旦断絶するのであれば、江古山遺跡にみられるような渡来系の要素をもつ、もしくは渡来系の人々を含む新たな勢力の勃興が想定されるのかもしれない。いずれにしても今後の調査の進展を見守る必要があるが、7世紀後半の伊保谷に基盤をおいた有力首長の投入する富や労働力が、古墳から寺院の造営に移行したと理解することができるだろう。その一方で亀首谷では、6世紀後葉から7世紀代に築造された首長墓と7世紀第3四半期創建とみられる舞木廃寺が、距離を置きつつも同じ空間の連なりの中に造られていて、古墳を築造した有力首長が氏寺として建立したと理解することが妥当に思える。

また、矢作川東岸、高橋地区の勸学院文護寺は、伊保廃寺と同範の軒丸瓦をもちいており、汎傷の進行具合をみると勸学院文護寺の軒丸瓦が先行する(筧2020)。本寺には塔心礎が残り、鴟尾も出土していることから、規模の大きな寺院であったとみられる。本寺の造営者については、「評制成立に伴って台頭した新興氏族が檀越の中心となって新たな開発を伴う事業を推進した」「鴨評」の新興氏族によって造営されたとみるのがふさわしい」とする意見がある(永井2020)。しかしながら、本寺から南東1kmの周辺には、7世紀～8世紀初頭の掘立柱建物30棟以上(うち長辺10m、柱間面積40m<sup>2</sup>を超える大型建物が9棟)が並び建つ高橋遺跡南西区があり、勸学院文護寺が造営されたとみられる7世紀末葉および8世紀初頭にかけては、四面廂建物(13-SH36)や廂が八角形となる総柱建物(13-SH14)、大型の掘立柱(側柱)建物群が北方位で並び、極めて首長居宅的な状況を示している(第10図/長田編2015/森2020a)。この高橋遺跡南西区周辺から望見できる場所に、高橋遺跡とは無関係に、新興氏族が規模の大きな寺院を建立するとは考えにくいのである<sup>4)</sup>。繰り返しになるが、矢作川東岸の高橋地区では7世紀後半のみならず8世紀初頭に至っても盛んに古墳築造が行われており、この地区の有力な伝統的氏族が、7世紀末葉に至ってようやく寺院造営に力を振り向けたとは考えられないだろうか。古墳時代の遺跡動向を確認する立場から終末期における寺院造営者を考えてみると、7世紀末葉の賀茂郡系軒丸瓦が葺かれた寺院の造営をことさら新興氏族に結びつける必要はなく、有力な勢力を維持もしくはさらに勢力を伸張させた在地の伝統的氏族による造寺と考える方が理解しやすい点も多いのである。ただし、永井が先の論を展開した際に対案と



第10図 高橋遺跡における7世紀～8世紀初頭の主要建物分布図

して示した「いくつかの在来有力氏族の合意によって選ばれた空閑地に建立された」可能性や、永井の説く新興氏族による造寺も成り立たない説明ではないとも感じている<sup>5)</sup>。考古学的な成果の蓄積をどのように解釈するかによって、「賀茂」の古代社会の理解は大きく左右されるため、今後とも問題意識をもち続けていくことが重要である。

【補記】本稿は、令和2年に刊行された『新修豊田市史 通史編 原始』のうち、筆者が執筆した「第五章 古墳を築いた時代」を主に伊保谷と亀首谷に焦点をあてて再構成、加筆したものである。説明不足になってしまった点や市域全体の動向については、同書を参照されたい。

### 【註】

- 1) 本稿では基本的に6世紀から奈良時代以前の8世紀初頭までを古墳時代後期と表記し、必要に応じて7世紀から8世紀初頭を終末期、その中でも7世紀末葉から8世紀初頭を最終末期とする。
- 2) 本墳の須恵器の時期をこれまでは7世紀中～後葉（東山16号窯式）としてきたが（森2020aなど）、須恵器を再検討した結果、本稿では7世紀末葉（岩崎17号窯式）に訂正する。
- 3) 大正15（1926）年刊行の『西加茂郡誌』に「大字四郷字東山」として「圓墳で段がある」「埴輪圓筒破片？」という記述があることなどから、筆者もこれを東山1号墳の説明と理解してきたが（森2020a）、最近小栗鉄次郎が書き残した資料を読み込む中で、この記述が実際には、下流域の井上1・2号墳を指すことが判明した（森2021b）。
- 4) ここには、古代史研究における「新興氏族」という用語に対する筆者の理解不足があるのかもしれない。古墳時代側から見れば、高橋遺跡のように6世紀後葉から集落が営まれ、7世紀代に規模を拡大し、同末葉以降には首長居宅的な状況を示す集落に拠点を置いていたのは、「在地の有力な伝統的氏族」のうち7世紀後半以降にさらに勢力を強めた氏族である。これを古代史側からみた場合に、7世紀後半の評制への移行に伴い新たに台頭した「新興氏族」というくくりの中に含めるのであれば、両者を二項対立的に捉える必要はなくなり、「新興」という言葉に違和感が残るものの、首肯できるところとなる。
- 5) 移住者を含む新興勢力が地域に関与した事例については、本稿の2（2）で述べたところでもあり、地域社会において新興勢力が果たした役割を過小評価することはできない。高橋遺跡では7世紀前半に18棟あった堅穴建物が7世紀第3四半期（東山16号窯式）に2棟にまで急減する状況がみられ、その後7世紀末葉から8世紀初頭にかけて再び急増して33棟が確認されるようになる。新たな四面廂建物や八角形の総柱建物、大型の掘立柱建物群が北方位をとって建ち並ぶのもこの時期である。時期の判別がしやすい堅穴建物の数の多寡だけでは判断が難しいが、高橋遺跡では7世紀第3四半期に何らかの出来事があったと考えることも不可能ではない。

## 【引用・参考文献一覧】

- 飯塚邦男編、2013、『江古山遺跡』豊田市埋蔵文化財調査報告書第55集、豊田市教育委員会：豊田。
- 太田 亮、1926、『日本國誌資料叢書 三河』、磯部甲陽堂：東京。
- 大橋 勤編、1974、『伊保遺跡』、猿投遺跡調査会：豊田。
- 長田友也編、2015、『高橋遺跡 中央区・南西区』豊田市埋蔵文化財調査報告書第66集、豊田市教育委員会：豊田。
- 笥 和也、2020、「下り松瓦窯の軒丸瓦について」『下り松古窯と西三河の古代瓦』、みよし市歴史民俗資料館：みよし。
- 齊藤大輔、2015、「古代東アジアにおける特殊鉄鉾の系譜」『古代武器研究』vol.11、古代武器研究会：山口。
- 齊藤大輔、2020、「古墳時代後・終末期における武装具流通の実態－三角穂式鉄鉾を事例として－」『土曜考古』第42号、土曜考古学研究会：桶川。
- 田端 勉、1977、「矢遠古墳」『古墳Ⅱ』豊田市埋蔵文化財調査集報第三集、豊田市教育委員会：豊田。
- 田端 勉、1993、「ふるさとの神々 灰竈神社の巻」『豊田市郷土資料館だより』No.5、豊田市郷土資料館：豊田。
- 田村 悟、2009、「北部九州の終末期群集墳再考」『終末期古墳の再検討』、九州前方後円墳研究会：長崎。
- 豊田市、1976、「平安時代」『豊田市史 一卷（自然 原始 古代 中世）』：豊田。
- 永井邦仁、2011、「三河国賀茂郡の古瓦」『豊田市史研究』第2号、豊田市：豊田。
- 永井邦仁、2012、「三河における古代寺院の成立－西三河を中心に－」『尾張・三河の古墳と古代社会』、同成社、東京。
- 永井邦仁、2016、「梅坪遺跡における古代集落の再検討」『豊田市史研究』第7号、豊田市：豊田。
- 永井邦仁、2017、「古代・中世の寺院と瓦」『新修豊田市史 資料編 考古Ⅲ 古代～近世』、豊田市：豊田。
- 永井邦仁、2020、「『鴨評』と『青見評』北部の古代寺院」『新修豊田市史 通史編 古代・中世』、豊田市：豊田。
- 中野 咲、2018、「日韓における移動式カマドの展開様相」『研究紀要』第22集、由良大和古代文化研究協会：奈良。
- 西宮秀紀、2020、「『許呂母之別』と『三川の衣君』」『新修豊田市史 通史編 古代・中世』、豊田市：豊田。
- 菱田哲郎、2014、「古墳の消滅とその背景」『21世紀の古墳時代像』古墳時代の考古学9、同成社：東京。
- 広瀬和雄、1998、「クラから神殿へ－古代カミ観念に関する一試論－」『先史日本の住居とその周辺』、同成社：東京。
- 深谷 淳、2011、「横穴式石室の奥壁隅に土師器を据える行為」『古代学研究』189、古代学研究会：枚方。
- 森本 徹、1996、「韓国冷水里古墳出土の竈形土器」『大阪文化財研究』第10号、大阪府文化財調査研究センター：大阪。
- 森 泰通、1994、「上小田遺跡出土の古瓦をめぐって」『三河考古』第7号、三河考古刊行会：豊橋。
- 森 泰通、1999、「西三河の終末期古墳小考－豊田市榎尾古墳群調査報告をもとに－」『三河考古』第12号、三河考古刊行会：豊橋。
- 森 泰通、2008、「中期古墳の領域」『井上1号墳 付載 井上2号墳』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第30集：豊田。
- 森 泰通、2015、「古代東海地方における堅塩づくりの製塩土器」『塩の考古学Ⅱ－古代地域社会における内陸出土の製塩土器を考える－』、山梨県考古学協会：笛吹。
- 森 泰通、2018a、「考察」『根川1・2号墳』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第76集、豊田市教育委員会：豊田。
- 森 泰通、2018b、「総括」『豊田大塚古墳Ⅲ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第75集、豊田市教育委員会：豊田。
- 森 泰通、2020a、「古墳を築いた時代」『新修豊田市史 通史編 原始』、豊田市、豊田。
- 森 泰通、2020b、「西三河の横穴式石室考」『横穴式石室の研究』、同成社：東京。
- 森 泰通、2021a、「豊田市の古墳時代資料調査補遺－市塚古墳・豊田大塚古墳・荒山1号墳・梅坪遺跡－」『豊田市史研究』第12号、豊田市：豊田。
- 森 泰通、2021b、「西加茂地方考古図譜」『小栗鉄次郎・生家 その暮らしの道具たち』、豊田市：豊田。
- 門田誠一、2001、『新版 海で結ばれた人々－古代東アジアの歴史とくらし』、昭和堂：京都。
- 吉田章一郎、1964、「豊田市の市塚古墳の発掘」『アカデミア』第四十二輯、南山学会編：名古屋。

